



# やよい図書館

## フレーズ&センテンス

### 「まさか、僕が出れるとは…」

「ら抜き言葉」は指定されて久しいが、近ごろは上記のような「れ不足言葉」が出現している…。言葉は時代と共に変化していくものとはいえ、著者は勢いよく喝破していきます。列挙されることばに「そうそう！」とうなずいたり、くすくす笑ったり、「わたしも使っている…」と冷や汗をかいたり、読んでいて楽しく忙しい。自戒のために読むつもりが、とても面白く一気に読んでしまいました。何気なく使っている言葉のひとつひとつが大切に思えてきました。

『カネを積まれても使いたくない日本語』内館牧子／著 朝日新書 (中井)

## かける X本精読

このコーナーでは、「誰か×誰か」や「誰か×何か」の意外な組み合わせから生まれた「X本」を紹介します。

### 田原総一郎×若手起業家 『起業のリアル』 プレジデント社

田原総一郎から、LINEやZOZOTOWNなどの代表にインタビュー形式で進むこの本。若き企業家たちの学生時代の様子や、今注目していることなど、あらゆる情報が飛び込んでくる1冊です。競争が嫌いな経営者や、営業は恋愛と似ているという起業家など、驚く発言も多々あり、難しくなく面白く読めます。何気なく見たり聞いたりしたことのある、そして少し気になる企業の中をぜひ覗いてみてください。(山田)



## Cinema library 第12回 長いお別れ

シャーロック・ホームズやアルセーヌ・ルパンのように、時としてその物語よりも名の知られた架空の人物がいます。作家レイモンド・チャンドラーが生んだ私立探偵フィリップ・マーロウもその一人ではないでしょうか。小説『長いお別れ(原題: THE LONG GOODBYE)』は1953年に初版が発売されて以来、映画化、TVドラマ化され親しまれてきました。日本では清水俊二氏の訳でこの作品を読んだことがある人も多いかもしれません。2007年には村上春樹氏が新訳『ロング・グッドバイ』を発表しています。

ある日、ある高級クラブの前で泥酔している男テリー・レノックスに出会った探偵フィリップ・マーロウ。マーロウのちょっとしたおせっかいから始まった二人の関係ですが、テリーが拳銃を手に現れた日から、マーロウは奇妙な事件へと巻き込まれていきます。2014年秋に舞台や登場人物をアレンジした日本版『ロング・グッドバイ』がTV放映されていたように、いまなお人気の衰えぬこの作品。「さよならをいうのはわずかの間死ぬことだ」など、あの有名なセリフは劇中でどのように語られているのか、小説と比べてみるのも楽しいですよ。

・『長いお別れ』レイモンド・チャンドラー／著 早川書房

・『レイモンド・チャンドラー読本』早川書房

次回は『博士の愛した数式』です。お楽しみに！(田中)



## 読書の窓

今回の読書の窓は  
5月号です

### 3月「男の!恋愛小説」

3月14日はホワイトデーですね!今回は男性作家・男性目線の小説を集めました。乙女心は難しいもの、男性が恋に悩む姿が目浮かぶような本もありますよ。

#### 『I LOVE YOU』

伊坂幸太郎 他／著 祥伝社

男性作家の紡いだ6つの恋愛物語が収められています。女性視点の多い恋の話で、男性の心情がとても多く描かれたこの本ですが、「相手は何を考えているのだろうか?」とあれこれ思いを巡らせる様子は、男性も女性も同じなのだとしみじみ思います。短編集なので、恋愛小説はどれも苦手…という方も、手にとってみてはいかがでしょうか。(本田)

#### 『東京公園』

小路幸也／著 新潮社

志田光司は写真家志望の大学生。光司が公園で写真を撮っていると、ある男から声をかけられ女性を尾行し、写真を撮るよう依頼されます。そしていつの間にか、ファインダー越しの彼女に恋をしていることに気付きます。光司と女性の恋の行方は如何に…。

この物語は三浦春馬さんが主演で映画化もされています。本とあわせてどうぞ。(佐藤)

#### 『ぼくのかみさん』

咲乃月音／著 宝島社

「恋愛」は自由だけれど、「結婚」となるとそうもいかない…。お嫁さんを貰い、実家の工務店を継ぐことを期待されて育った主人公、田丸誠。ついに「嫁さんにしたい人」を連れてきますが、相手を見た瞬間、それまで喜びに沸いていた家族は一転大混乱に陥ります。主人公やその父親、祖父、妹の旦那など、登場する全ての男性を愛おしく思える作品です。(田中)

#### 『電車男』

中野独人／著 新潮社

#### 『そのときは彼によろしく』

市川拓司／著 小学館

### 4月「いちご」

4月と言えば春。いちごがおいしい季節がやってきました!今回はタイトルにいちごと書かれた本や、いちごのように甘酸っぱいストーリーの本を集めました。

#### 『春季限定いちごタルト事件』

米澤穂信／著 東京創元社

小市民として生きることをモットーとする小嶋君と小山内さんの日常を描いた、青春ミステリです。二人の周りで起こるちょっと不思議な出来事。小市民であるために、目立つことはしないと誓った小嶋君ですが、なぜか毎回その謎を解くはめに…。現在『秋季限定栗きんとん事件』まで出ており、二人の微妙な関係からも目が離せないシリーズです。(丸山)

#### 『はつ恋』

ツルゲーネフ／著 新潮社

「初恋は実らない」なんて言葉はよく聞きますが、その実らない初恋代表がこの作品ではないでしょうか?エゾ苺の茂みにたたくずむジナイダに一目惚れしたウラジミール少年。しかしジナイダの心は別の男性に向かっています。「これが恋なのだ」というウラジミールの心の叫びは、150年以上経った今でも、我々読者に強く響いてくることでしょう。(丸山)

#### 『くまいちご』

木暮正夫／作 くもん出版

春に生まれた2頭の子グマと母グマの物語です。可愛い子グマたちはすくすくと育ち、やがて大人になります。しかし、優しくった母グマが急に冷たい態度をとるようになり…。いつまでも母のそばにいたい子どもと、子どもの独り立ちを願う母。別れの日に母グマが連れて来た場所は、ノイチゴが生い茂る谷間でした。母子の絆を感じる一冊です。(熊谷)

#### 『春になったら苺を摘みに』

梨木香歩／著 新潮社

#### 『いちご同盟』

三田誠広／著 集英社